

# 「家族（仮）-前編-」

## —初稿—

2025/8/19  
脚本 太郎

人物表

衣川	サトシ	(13)	中学一年生
荒屋	ヒトミ	(12)	長女。小学六年生
荒屋	ヒトシ	(7)	ヒトミの弟。小学一年生
衣川	孝志	(37)	サトシの父
荒屋	千代	(34)	ヒトミとヒトシの母。孝志の内縁の妻

# 1. 山道（夕）

半端に舗装された狭い道。両側が林のようになつて  
いる。

走行中の一台の乗用車。

孝志の声 「じゃあ何、俺が悪いの？」

# 2. 車内（夕）

運転席で運転している衣川孝志（37）と助手席に  
座る荒屋千代（34）、激しく口論している。千代  
は手に印刷した紙の地図をくしゃくしゃにして持つ  
ている。

後部座席に座るのは右から、荒屋ヒトミ（12）、  
荒屋ヒトシ（7）、衣川サトシ（13）の三人。ヒ  
トミとヒトシの二人は強張った様子で身を寄せ合つ  
ており、サトシはつまらなそうな様子で手元のスマ  
ホゲームに興じている。

千代 「だからさつきの道左じやないのって言つたのよわたし。  
何でいつつも重要な時に限つて頑なにわたしの『言う』と  
スルーするわけ？」

千代、紙の地図を振つて抗議。

孝志 「知らねえよ。お前が言うの遅いんだろ」

千代 「アンタの反応が遅いんでしようが。それともまさか右と  
左も分かんないの？」

孝志 「うるせえな……大体右だの左だの言われても俺から見て  
なのかお前から見てなのかも分かんねえんだよ」

千代 「同じ方向向いてんのに『どっちから見て』もないでしょ  
馬鹿じやないの？」

千代、信じがたいといった顔でダッシュボードを叩  
く。

孝志、渋い顔。

孝志 「えいやあ何、俺が悪いの？」

千代 「さつきからそう言ってんでしょうが！」

千代、膝で助手席のグローブボックスを思いきり蹴  
る。

ヒトシ、ビクッと肩を揺らす。ヒトミは身を竦める。

ヒトミが安心させるように、ヒトシの手を握る。

サトシは変わらずスマホゲームを続いている。

「そもそも」の時代に紙の地図見ながら運転って何、レト

口趣味？ 遠出する前の段階でカーナビ直しといってつて

わたし何回——」

孝志 「だーもうるつせえなあ！」

孝志、拳をホーンパッドに叩き付ける。クラクション

ンが数秒鳴り続く。

孝志 「俺の車なんだからいちいち文句言うな寄生虫が！」

孝志がアクセルを踏み込み、車のスピードが上がつ

ていく。

ヒトミとヒトシ、ハラハラした様子で前方を見ている。

やがてスピードが戻っていく。

孝志と千代の言い合いは続いている。

サトシ、ゲームでミスをしたようで、小さく舌打ち。

ヒトミ、呆れた様子でサトシを見る。

二人の目が合う。

サトシ 「（小声で）何だよ？」

ヒトミ 「（小声で）別に。ただ香氣な兄貴候補だなーって」

サトシ 「（小声で）放つとけ」

サトシ、視線を前に向けて、

サトシ 「（小声で）どうせ兄妹になる見込みも薄いんだ」

ヒトミ、嫌そうな目でサトシの視線を追う。

### 3. 山道（夕）

向かって左側は同じく林のようになつており、向かって右側には小さな湖がある。

走行中の一台の乗用車。エンジンから異音を発している。

ヒトミの声 「（小声で）確かに」

× × ×

山道の端に乗用車が停車している。

孝志、エンジンルームを開け、苛ついた様子で作業している。

千代は助手席でスマホを操作。

サトシ、ヒトミ、ヒトシの三人は先ほどと同じように後部座席で座っている。

「ねえまだ直んじゃないの？」

「うるつせえな、素人にそんな簡単にどうにかできるかよ。J A Fが存在しない世界線から来たのかてめえは」「どうすんのよスマホも圈外でこんな山ン中で身動き取れなくてさあ」

千代、辺りを見回しながら、

「熊とかさあ、出てくるかもよ？ 襲われたらどうすんの？」

ヤバいよ？ ねえ聞いてる？」

ダッシュボードをバンバンバンバンと執拗に叩く。

孝志、作業する手が乱暴になっていく。

「うるつせえうるせえうるせえうるせえ……分かってんだよそんなこと……焦らすなよマジで」

孝志の奥歯がギリギリと鳴る。

数秒沈黙。

孝志の汗がエンジンルームに滴る。

孝志、舌打ちと溜息。

「こいうの全部俺だよ……」  
「面倒なのぜんつぶ俺がやらされてるよ……」

孝志が額の汗をぬぐう。

千代を睨みつける。

「ふざけんなよ本当。バスのくせに何様なんだよ」

千代、耐え兼ねたように髪を搔きむしって、

「あーもうマジで無理、限界。別れよ」

千代、スマホを放り投げるようダッシュボードに置く。

孝志、信じられないという様子で千代を見る。

「はあ？」

「帰つたらすぐ荷物まとめて出てつてね」

孝志、しばらくわなわなと震え、

孝志  
千代

孝志

「じゃあもう直さねえよ、んなモン」

車を思いきり蹴る。

孝志

「何なんだよさつきからその態度は、おかしいだろ。てめえは面倒なこと全部俺にやらせてるくせによ」

孝志、車を回り込んで助手席のドアまで歩いていく。

千代、身を強張らせる。

孝志、乱暴にドアを開ける。

千代  
「え、ちょっと……」

孝志

「文句あるなら後全部でめえでやつてみろよ」

孝志、千代を滅茶苦茶に殴りまくる。

孝志  
「（殴打に合わせて）死ねつ、死ねつ、死ねつ。お前なんか、熊に食われて、死んじまえつ」

ヒトミとヒトシ、身を寄せ合っている。ヒトミはヒトシの手を握っている。サトシは変わらずスマホゲームをしている。

× × ×

千代、鼻血を垂らしてダッショボードに頃垂れ、泣いている。

孝志は息を切らせ、車から遠ざかっていく。

孝志  
「ションベンしてくるから、俺戻つてくるまでに直しつけよ。できるもんならな」

#### 4. 車内（夕）

千代の嗚咽だけが車内に聞こえている。

彼女はダッショボードに頃垂れて泣いたまま、顔を上げない。時折姿勢は変えずに、助手席と運転席の間の収納スペースに置いてあるボックステイツシュからティツシュを取り、鼻をかんだり涙を拭つたりしている。

沈黙。

やがてヒトシ、不安そうな様子で、

ヒトシ  
「……おかあさん？」

ヒトミの顔が引き攣る。

直後に千代、奇声を上げて思いきり髪を搔きむしる。  
ヒトミとヒトシ、驚いて仰け反る。

サトシは顔を上げて眉を顰める。

千代の引っこ抜かれた髪が幾つか落ちる。  
千代、ボックステイツシュからテイツシュを一気に  
何枚も乱暴に取り、豪快に鼻をかむ。

使用済みティッシュを投げ捨てる。

開いたままの助手席のドアから出ていく。

ヒトミ、まずい、という顔。何かを察した様子で、  
ヒトシをかばうように彼に覆いかぶさる。

サトシは辟易したような顔。

千代が外からヒトミが座っている方の後部座席のド  
アに近付く。

ドアを思いきり開ける。

ヒトミとヒトシの二人は目をグッと瞑っている。

千代がヒトミを滅茶苦茶に殴りまくる。

サトシがそれを不快そうな表情で見ている。

千代、しばらく殴り続けると、やがてえずき声をあげ、口元を押さえる。

千代が駆け出す。

サトシは小さく溜め息を吐くと、退屈そうな表情に戻り、ゲームを再開。

## 5. 山道（夕）

千代、車から離れ、湖の方へ走っていく。

走っている途中で嘔吐し、その場でうずくまる。  
再び泣き始める。

## 6. 車内（夕）

ヒトミ、服と髪が乱れており、鼻血を流している。

ヒトシがヒトミにしがみついて泣いている。ヒトミ  
は苦痛に耐える表情でヒトシの頭を撫でている。  
ヒトミの息は僅かに荒い。

サトシ、変わらずスマホゲームをしている。

やがてスマホから目を離し、呆れた様子でヒトシを見る。

サトシ 「何で殴られてない方が泣いてんだよ」

ヒトミ、サトシを睨みつける。

ヒトミ 「何その言い草」

サトシ 「いや余計なお世話だったか」

ヒトミ 「かばうそぶりも見せない兄貴候補に何も言う資格なし。  
……いや、そういうやさつき兄妹にならないこと確定した  
んだつたつけ？」

サトシ 「……そうだったな」

サトシ、スマホゲームを再開。

ヒトミが苦痛に耐える表情でヒトシを抱き締める。

サトシ、横目でチラツとヒトミたちを見て、すぐ思  
い直したようにゲームに視線を戻す。

サトシ 「やることが多くて忙しそうだな、と思つただけ」

ヒトミ 「お姉ちゃんだからね。こればっかりは」

サトシ 「ふーん。大変だな」

ヒトミ 「大変よ。そつちはやることがなくて暇？」

サトシ 「まあ。なきやないで気楽でいいけど」

サトシ、ゲームでミスをしたのか僅かに顔を顰める。

ヒトミの息の荒さが少し増す。

ヒトミ 「あっそ、物は言いようね」

ヒトミがヒトシを抱き締める力が増す。ヒトシの背  
中にはヒトミの鼻血がポタポタと滴っている。

サトシ、衣擦れの音にゲームの手を止め、ヒトシの  
背中に垂れた鼻血と前方の収納スペースにあるボッ  
クスティッシュを見比べる。

ヒトミ、僅かに言葉を探すような間。

サトシ、ティッシュに視線が固定。眉を寄せる。

ヒトミ 「でも、そんなに暇でお気楽ならや」

ヒトミが鼻をすする。

ヒトミ 「どうせ最後なんだし、今から家までの片道分くらい、わ  
たしのお兄ちゃんでいてくれない？」

サトシ、驚いた様子でヒトミを見る。

ヒトミは涙目で泣ぐのを堪えている。どこか縮るような表情。

サトシ、ぎょっとした表情。

ヒトミ 「ダメかな？」

サトシ、困惑で何も言えない。

すると徐々にヒトミの表情が憎悪に変わっていく。

サトシ、ハツとすると、咄嗟に表情を取り繕い、ヒトミからスマホに視線を逸らす。

サトシ 「何だよ今更」

ヒトミ、失望の顔。

直後に表情を和らげると涙を拭つて、苦笑。鼻血は流れっぱなし。

ヒトミ 「ま、無事に帰れるかも分かんないけどさ」

サトシ、動搖をさまかすように、

サトシ 「下らねえ」

と吐き捨て、車のドアを開けて外に出る。

続く